

私が、民家園でボランティア活動をするようになったきっかけは、四十年間あまりの勤務から解放され、「サーこれからどうしようか？」家でゴロゴロしているわけにもいかない。そんな折から、妻が区の広報紙の片隅に“ボランティア募集”の記事を見つけ、「これでも行って見たら」の一言でその気になってしまった。決して、社会奉仕とか、世の為人の為とかいう高尚な動機からではなかった。

振り返ってみると、昨年で十五年の月日が流れましたが、こうした永年の活動に従事出来たのは、私を結びつける「三つの要因」がありました。



(写真は平成の大修理)

まず、一つ目は、気持ちの上で徐走をつけてくれた三輪先生の講和であった。毎月、定例会の後半に、日本人の生活文化や宗教、寺社建築棟のお話で興味をそそるものばかりでした。園外の研修では「西本願寺御影堂平成の大改修」を目の当たりにしての解説は思い出深いものがある。工事現場の足場骨組みを十メートルばかり上って見た大屋根の曲線は、スキー場のゲレン

デを思い起こさせるほど大掛かりなものであった。

二つ目は四季折々の風情を肌で感じ採ることが出来ることです。

- 春には、草木が清新の気にあふれ、早朝、小鳥の合唱に迎えられる。
- 夏には、囲炉裏端で涼風を感じ、土間に入ると“ひんやり”とした感触。
- 秋には、彼岸花に旧民家の住人を想い、“すすき”に命のはかなさを憶える。
- 冬には、合掌家に積もる雪景、つるべ落としの夕日を軒下に眺める。

三つ目は、ボランティアの仲間達のほかに、多方面から訪れる多くの人々との出会いがあります。活動の当初の頃は、間違っただけを説明されると困るから、「来園者とあまりしゃべらないように」と指導を受けた時期もありましたが、今では園内ガイドなどで、積極的に民家園をアピールするようになってきています。

私ごとですが、来園者の中で、古民家に大変興味をお持ちの方と遭遇し、京都南丹波の「美山の郷」の話が出た折、私はあそこにはまだ行った事ありません。あそこは、鉄道も幹線道路も無く不便なところと聞いていますが…と云ったところ。「是非行ってみてください、私が車で案内しますから」と云いながら名刺をくださいました。この方は、京都在住で建築事務所勤務の一級建築士の方でした。

こうした出会いも、古民家からの会話が出発点でした。人々の心をなごませ、いにしえの生活文化を伝えるこうした施設は、後世に残していきたいものです。